

✿ 発掘調査の概要

檜隈寺の調査(飛鳥藤原第172次)

国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)の整備工事が本格化するなか、今年度も檜隈寺周辺の調査をおこないました。今回は、以前から建物跡と想定されていた、中心伽藍南東方向にある土壇状の高まりを含めた調査区について報告します。

調査では、土壇状部分で、大型の柱穴を2基確認しました。2基の柱穴(掘方)の大きさや形は、おおよそ1辺1.5～1.8mの矩形をなし、深さ1.2mで、ともに柱根が残存していました。柱根間の芯々距離は約2.7m、柱根は直径約70cmもの太さです。2基を結ぶと、その方位は檜隈寺中心伽藍の方位の振れと一致し、さらに塔の中軸線がこの2基の間を通ると見ることができます。柱根の太さ、方位の振れ、位置を勘案すると檜隈寺に関わる施設の柱穴と見て良さそうですが、柱穴掘方からは、平安時代の土器が出土しました。したがって、7世紀頃の檜隈寺にとまなうものではなく、重要文化財に指定されている、おみあし於美阿志神社石塔婆にとまなうと考えられます。

この十三重の石塔婆(十一重現存)は、その様子から平安時代後期の作と推定されており、檜隈寺塔跡の中心に建っています。

柱穴はこの2基の他に関係する穴は確認されませんでした。したがって、屋根が架かるような建造物ではなく、幢竿支柱(儀式に際して幡や旗を付けた竿を支える柱)の可能性が高いと見ています。

檜隈寺を氏寺としたと見られるやまとのあやうじ東漢氏は、柱建を競う儀式で高く太い柱を建てたので、「大柱直」と呼ばれたと、『日本書紀』(推古28年条)に記されています。今回の柱根は、年代的に直接この記事には関係しませんが、「大柱直」の心意気を感じさせる柱根と言えるでしょう。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



大型柱穴2基(南東から)